



シュタイアー デュオの極み

公演に寄せて

～シュタイアーとゼパックによる日本初披露のデュオ

那須田 務(音楽評論家)

チェンバロ・フォルテピアノの奇才アンドレアス・シュタイアーは、1980年代にドイツの古楽アンサンブル、ムジカ・アンティクワ・ケルンのメンバーとして頭角を現し、その後ソリスト、室内楽、ドイツ・リートにと多方面で活躍。作品への深い洞察力、リズムの律動感、ひらめきに満ちた、明確でダイナミックな表現が魅力で、これまでに数々のレコード賞や音楽賞を受賞。この6月にも、優れたバッハ演奏家に贈られるライプツィヒ市のバッハ・メダルを授与された。

本日はそんなシュタイアーの室内楽のコンサート。共演のゼパックはモダンとピリオド楽器の名手。シュタイアーいわく、「私たちは17年前から共演を重ね、音楽的に気が合うだけでなく、人間的にも深く理解し合っている」とのこと。

また、当公演のフォルテピアノは、ヨハン・ゲオルク・グレーバー(インスブルック1820年)のオリジナル。基本的に鉄の構造物を用いない木製で平(並)行弦、6オクターヴ(FF~F4)、ウィーン式アクション。ペダルはダンパー、シングルとダブルのモデラート(弦とハンマーの間にフェルト等が出てきて柔らかな音色になる)、ファゴット(低音弦に羊皮紙等の素材を巻いた半円の筒が触れてびりびりとしたリード管のような効果が得られる。なおモデラートと同様。素材や仕組みは楽器によって異なる)、ウナコルダ。ウィーン式アクションによる軽やかなタッチと平行弦の澄んだ響きが特徴だ。モダンのピアノに比べて絶対的な音量が小さいため、弦楽器とのサウンドのバランスにおいても作曲家たちが知っていたであろうものに近づけられる。モダンの楽器とは一味も二味も違う、ウィーン古典派のヴァイオリンとピアノのデュオの魅力が味わえるだろう。

「シュタイアー デュオの極み」

2024年10月27日(日) 15:00

兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール